

「底が突き抜けた」時代の歩き方 487

働くかなければいけないか、結婚しなければいけないか

『就職がこわい』に続いて、香山リカが『結婚がこわい』(講談社)を上梓している。同じ「こわい」であっても、その度合いは異なる。《「就職」に関しては「あまり恐れずにしてみれば」という思いがあったのだが、「結婚」は基本的にしたい人がしてたくない人はしなければいい、というきわめて個人的な問題だと思っていたからだ》(同書「おわりに」と、彼女はいう。そこには、人は「結婚」しなくとも生きていけるが、「就職」しなければ生きていけない、という強固な事実が張り付いているにちがいない。実際、「結婚」の幅は「就職」の幅よりも小さく、「就職」しなければ「結婚」(生活)は成り立たないが「結婚」しなくとも「就職」は成り立つのである。だから、多くの人が《「結婚」は基本的にしたい人がしてたくない人はしなければいい、というきわめて個人的な問題だと思》い、「就職」はそうではないと区別するのであろう。

かつての社会では、「就職」の次に「結婚」が待ち受けているという意味では、「就職」と「結婚」はほとんどイコールであった。「結婚」の次に「就職」ではなく、あくまで「就職」の上に「結婚」が成り立っているという順序は確固としていた。いまは働いていないが、「結婚」したいために「就職」するという場合でも、「就職」することによって生活の基盤を築いた上で「結婚」するという順序は決まっていた。それは成熟社会となった現在でも、ほぼ変わりはない(筈だ)。(筈だ)と留保を付けるのは、必ずしも「就職」が「結婚」の前提にはなっていない多様なケースがみられるようになったからだが、それでも「就職」がフリーター的なアルバイトであろうとも、「結婚」生活を維持しなければならないという至上の課題の前では、誰でも働くことを免れえない。

かつての「就職」 - 「結婚」には、若者が社会に出て行くために必ず通過しなくてはならない、閥門としての意味あいが含まれていた。若者が社会の中で一人前になるためには、「就職」しなければならなかつたし、「結婚」しなければならなかつたのだ。貧困社会では、若者にとっての選択肢はそれ以外にありえなかつた。では社会に出て行きにくなければ、社会の中で一人前になりたいという気持をもたなければ、「就職」も「結婚」もしなくてもよい、というより、できなくなるという選択肢は予め封じ込められていた。必需消費よりも選択消費がはるかに上回る消費社会としての成熟社会になると、貧困社会で封じられてきたその選択肢が表面に浮かび上がってくるようになった。成熟社会が生み出した余裕が、余裕のなかつた貧困社会で禁圧されてきた選択肢を受けとめられるようになったということだ。だから成熟社会では、これまで考えられもしなかつたことが次々と掘り起こされてくるのである。成熟社会であるゆえんといつてよい。

振り返ってみると社会の中で一人前になるためには、若者は「就職」し「結婚」しなくてはならない、というのは神話にほかならなかった。その神話を堅固に補強していたのは、「結婚」＝「幸福」という等式であった。成熟社会になって「就職」・「結婚」の神話が崩れ始めたのは、おそらくその神話を補強してきた「結婚」＝「幸福」の定説が成立しなくなつたからである。その定説に導かれて達成された成熟社会では、その定説そのものが無化されることになるのは必然であつて、かくして「結婚」＝「幸福」の等式はその対極に、「結婚」しなくても「幸福」あるいは「結婚」しないほうが「幸福」という非等式を生みだしていった。成熟社会で「豊かな家族生活」を実現するという目標を失つてしまつた「結婚」生活が、さまざまな空虚や不合理、家族成員の居場所のなさなどの多くの問題に直面するなかで、「つまらなさ」を一杯味わつてきた若者が「結婚」＝「幸福」に虚偽意識を抱くようになるのは当然であった。

「結婚」が必ずしも「幸福」の前提ではありえないことに多くの人々が気づくようになったとき、あるいは「幸福」になるために「結婚」以外の選択肢もありうると思われるようになったとき、「結婚」は香山リカがいうように、《基本的にしたい人がしてたくない人はしなければいい、というきわめて個人的な問題》になり、一人前になるためにしなければならないものではなくなつていった。「結婚」が「しなければならないこと」ではなくなつたとき、そこで問い合わせられていたのは、「結婚」とイコールで結ばれてきた「就職」である。食べることに困らないのであれば、「就職」もまた「結婚」と同様に、「しなければならないこと」ではなくなつっていく。《「就職」に関しては「あまり恐れずにしてみれば」》という香山氏の思いが、「結婚」に関して「あまり恐れずにしてみれば」という思いと変わらなくなれば、「就職」もまた、《基本的にしたい人がしてたくない人はしなければいい、というきわめて個人的な問題》にまで敷居が下がつたとしても、別におかしくはなかつた。

平成17年度版「青少年白書」から浮かび上がつてくる、若者の半数以上が抱く「希望の仕事」とは、「結婚」にスライドさせれば「希望の結婚」にほかならなかつた。彼らの「希望」の中身が曖昧で具体的な手掛かりを帶びていない以上、彼らにとって「希望の仕事」とは「理想の仕事」に近かつた。同様に「希望の結婚」もまた、「理想の結婚」と同義であった。いうまでもなく「理想」は手の届かないところに棚上げされて、つねに見上げるほかないものであったから、「就職」や「結婚」が「理想」にまで格上げされてしまうなら、それらは「するもの」ではなく、「見上げるもの」に変わつてしまふことになる。明白なのは、「就職」や「結婚」を希望や理想に変えて、その前から後ずさり始めたのは若者たち自身であるということだ。生きることがまず生きてみるとあるように、「就職」や「結婚」もまた、「まずしてみる」ものであるのに、それらの敷居を高くして、そこからどんどん後退していく若者の「生きることの切り詰められ方」が鮮明に浮かび上がつてくる。

《「その仕事は私の能力では無理です」と言い放つ若者たち。「ひきこもり」のまま衰弱

死する若者たち。彼らは、学習や修練によって、または、治療によって、自分が変わるという可能性を、みじんも信じていない』と、「若者に蔓延する『確固たる自信のなさ』」(『中央公論』03.5)に注目しているのは、斎藤環である。「60年代の昂揚」以降の70年代に入って、若者の「三無主義」が注目され、大学生のスチューデント・アパシーが指摘され、「シラケ世代」という言葉も流行した。成熟社会に至って、個人としての成熟に意欲を示さない若者の無気力ぶりが、フリーター・ニート、ひきこもりという深刻な若者たちを取り始めたとき、ようやく社会も旧世代も容易ならぬ事態であることに気づき始めた。

《本年2月22日に『読売新聞』が発表した「全国青少年アンケート調査」の結果をみると、改めて今の若い世代特有の絶望の深さを知らされる思いがする。これは読売新聞社が中学生以上の未成年者5000人を対象に実施したものだ。回答の実に75%が「日本の将来は暗い」と考え、同じく75%が努力しても成功するとは限らないとしている。外国からの侵略に対しては、「逃げる」が44%で最多、「降参する」も12%だった。「日の丸」「君が代」については「関心がない」が43%、しかし一方で、「親の老後の面倒はみるべき」との回答は82%と高い。》

また、《将来については出世志向よりも「好きな仕事(69%)」や「幸せな家庭(62%)」を重視し、経済的にも「ほどほどに暮らせればいい(49%)」という調査結果から、若者の非社会的傾向が見出せるとして斎藤環は、若者の「非社会性」が社会的関心のみならず、社会にコミットすることからの「ひきこもり」傾向にあることに注目して、次の事例を取り上げる。

《ある大手企業に勤務する知人に聞いた話である。最近の新入社員は、なにかができないことを堂々と宣言するのだという。「それは私の得意分野ではありません!」「その仕事は私の能力では無理です!」などと、あっけらかんと言い放つというのだ。そこにはもはや、学習や修練によって自分が変わるという期待すら存在しない。まるで「自信がないこと」にかけては誰よりも自信があるとでもいうような、「確固たる自信のなさ」とでも言うべき態度が蔓延しつつあるというのだ。》

できないことに対してできる振りもしない代わりに、教えてもらえば自分でもできるようになるかもしれない、ということを考えない。だから、できない自分を押し通すしかない。もちろんそれは、できるかもしれない可能性に対する自分からの「ひきこもり」であり、できない自分への「ひきこもり」にほかならない。精神科医である斎藤環は、「ひきこもり」の若者たちに同じ傾向をみてきたという。

《なるほど、私は「ひきこもり」に特有の葛藤として、「ひきこもりたくないのにひきこもってしまう」という、一種の悪循環に陥った自意識、あるいは家族関係の袋小路を示してきた。そして、こうした悪循環さえ解消できれば、ひきこもり状態は改善に向かうのだ、と主張してきた。しかし、多種多様な「ひきこもり」の中には、ひきこもること以外の生活が考えられないという意味で、確信的にひきこもっている若者たちも少な

からず存在する。そこにはすでに、自尊心やアイデンティティをめぐる葛藤などという「贅沢品」などなきがごとしだ。強いて言えばやはり彼らにも、「自分にはひきこもること以外の選択肢はない」という判断については消極的な自信があるのだ。そして同時に、彼らは治療や支援によって自分が変わるという可能性を、みじんも信じていない。』「若者に蔓延する『確固たる自信のなさ』」は、なにがあっても《自分が変わるという可能性を、みじんも信じていない》ことによって強固に支えられている。自分が変わる可能性を信じていないということは、逆にいえば、自分が変わらない可能性を信じているということである。だが、自分が変わらないことが可能性であるためには、自分が変わらないことを強く肯定する気持がなければならぬ。「変わらないためには、変わらなくてはならない」という逆説にも支えられて、自分の変わらなさを押しだす「確固たる自信」がそこには漲つていなければならぬ。そのときにはじめて、自分が変わらない可能性というものが成り立つにちがいない。自分が変わる可能性を若者が信じていないのは、彼らが自分自身に対して深く絶望しているからである。絶望の際限のなさにおいて、若者は自分が変わる可能性をみじんも信じていないのだ。だから、自分が変わらないということは彼らにとって可能性である筈もなく、際限のない絶望にほかならないのである。

変わらない自分に対する絶望の深さを象徴する「ふたつの衰弱死」事件に、斎藤環は触れ、次のように言及している。

03年2月20日付『毎日新聞』の記事によれば、東京都昭島市のマンションで、32歳の無職女性が衰弱死し、同居していた友人の女性（30）も脱水状態で発見された。お金がつきて食事すらもなくなり、一ヶ月以上何も口にしていなかったのだという。彼女たちは一ヶ月前から電気も止められており、電話や携帯電話も持っていないかった。彼女たちの実家は市内にあり、10年以上前からの友人同士だった。詳しい続報がなかったため、なぜ彼女たちがそのような結末を選んだのかはわからない。しかし私は、彼女たちが一種のひきこもり状態にあった可能性を強く疑っている。親との断絶を強く望んで単身生活にはいるひきこもり青年は珍しくない。彼らは世間はおろか、肉親の訪問すらもいっさいシャットアウトして、何年もの間ひきこもり続ける。たしかに友人と二人でひきこもるという例は経験がないが、二人だったからこそ死に至るまで事態が極端化したのかもしれない、奇妙な事件と言うだけではすまない徵候的なものを感ずる。

しかもこれは「最初の事件」ですらない。たとえば2001年8月29日付の『毎日新聞』は、宮城県で32歳と26歳の兄弟が自宅で衰弱死しているのが発見された事件を報じている。同居していたこの兄弟は定職がなく借金に追われていたらしい。遺体発見時、電気を止められた冷蔵庫内には干からびた梅干しが数個残っていただけ、庭には炊飯器が投げ捨てられていたという。兄弟の両親は数年前までに亡くなり、二人の妹が町内に住んでいるが行き来はほとんどなかった。』

確かに衝撃的な事件だが、人里離れた僻地で起こっても不思議ではない「衰弱死」が、

この密集した都会で起こっているということが衝撃的なのではない。他人に救出を求めて生存することを選択するよりも、人知れず「衰弱死」を選択していったことが衝撃的なのである。あるいは、貧困社会を脱したこの成熟社会にあって、飢餓による「衰弱死」が起こるということ自体が衝撃的なのだ。しかし、《彼らは世間はおろか、肉親の訪問すらもいっさいシャットアウトして、何年もの間ひきこもり続ける》という生活を選択したときから、あるいは、「自分にはひきこもること以外の選択肢はない」と判断したときから、彼らが誰の助けも求めず「衰弱死」に行き着くことになる（かもしれない）ことは予測されていた。つまり、この「ふたつの衰弱死」事件は「ひきこもり」が辿る運命を明示していたのだ。したがって、《みずからのひきこもり体験を克明につづった本『『ひきこもり』だった僕から』で知られる上山和樹》が、《宮城の事件に強く反応した》のも、不思議でもなんでもなかった。

《上山氏はこの事件に深い共感と「自分もそうなるのでは」という恐怖を覚えるというのだ。ひきこもり生活が長期化してくると、徐々に外出が恐ろしく、ひどく辛いものになってくる。ちょっと体がだるかったり、気分がすぐれなかつたりするとき、そのまま布団に寝ているのと外出して食料品を買い出しに行くのとでは、むろん寝ているほうが楽だ。つまりはそうした「消極的選択」が重ねられた結果が「衰弱死」なのだという。もちろん彼らとて、飢えることや飢餓を避けたいのは当然だ。しかし、それにもかかわらず、ある地点からはもはや、引き返すことができなくなる。彼らは文字通り「死んでも」他人の世話にはなれなくなってしまうのだ。》

「ひきこもり」が蟻地獄に嵌まつたかのような生活であることを、この記述は連想させる。しかもその蟻地獄は、自分の手でどんどん掘って行って抜け出せなくしているのだから、周囲はどうすることもできない。ネット心中もまた、このような「衰弱死」と通底する要素があることを示唆しつつ、《なぜ彼らは変わらないのか。より正確には、なぜ彼らは「体験によって自分自身が変化する可能性」をかくも信ずることができないのか》、と斎藤環は問う。彼がここでもちだすのは、ラカン派哲学者のスラヴォイ・ジジエクが語るシニシズムである。《ある種のシステムや規範のもとでは、人々はそれが嘘であることを知っているにもかかわらず、あるいは知っているからこそ、それに進んで従う》という人間の行動だ。

「60年代の昂揚」は、学生たちが革命を信じていたから起きたのではなく、革命の嘘を信じたからこそ、いや、信じようとしたからこそ、起きたのである。まさに革命が《嘘であることを知っているにもかかわらず、あるいは知っているからこそ、それに進んで従う》ったのだ。つまり、一方で革命なんて嘘だと思いながら、他方でその嘘を信じて運動に踏み入った点で、当時の学生たちはシニカルそのものであった。ところが、その学生たちの中から、革命が嘘だと思う者は敗北主義者である、という一団が突出することになった。革命というものは革命を信じるなかからしか、革命を起こそうとするなかからしか、やってこないという主張を強力に唱えて、銃を入手してやがて浅間山荘

事件と連合赤軍事件を惹き起こして、自滅していった。「60年代の昂揚」を生みだしたシニシズムを否定した彼らは、自身の自滅によって「60年代の昂揚」に止めを刺したのである。

《対象や行動の価値を信じすぎないこと、ほどほどの距離を維持することは、ときには動機と倫理性を維持する上で欠かせない姿勢である。いわゆる「シラケ世代」は、まさにシニカルさの初期段階というべき世代でもあった。しかしこの世代から膨大な数のオタクが生まれたように、シニカルであることは必ずしも行動を抑制しない。むしろ旧世代の価値観に縛られない、巨大な趣味の共同体がもたらされたのだ》、こう斎藤環はいう。しかし、60年代末の若者たちの行動の熱気もまた、巨大なシニシズムの塊であったことを認めなくてはならない。ただ、当時の学生たちの行動がシニシズムから一見遠いように感じられたのは、そのシニシズムはロマンチズムに覆われていたからである。嘘と知りつつ、それに進んで従うのはシニシズムであったが、他方でロマンチズムでもあった。このシニシズムとロマンチズムの競合関係を突き崩したのが、赤軍派の学生たちであり、彼らはシニシズムを否定して、ロマンチズム一本で革命を包み込んで行ったのだ。

その結果、連合赤軍事件は革命のロマンチズムを木端微塵に打ち砕いてしまったのである。だが、シニシズムは打ち砕かれたわけではなかった。しかし、嘘とわかっているなら、もはやそれに従う必要はないところまで進んで、シニシズムも解体されてしまった。打ち砕かれたのは革命のロマンチズムであり、解体されたのは革命のシニシズムであった。もちろん、革命とは大文字の世界を象徴していたから、「60年代の昂揚」の終焉によって、若者は二度と嘘が明らかになった領域に足を踏み入れようとしなくなった。《人々はそれが嘘であることを知っているにもかかわらず、あるいは知っているからこそ、それに進んで従う》のは、嘘が眞に変わるかもしれないという思いをどこかで抱いていたからかもしれない。嘘がとことん嘘であるとは思っていなかった。しかし、革命の嘘が明らかにされることによって、嘘はどこまでも嘘でしかなくなってしまった。そこから「シラケ世代」が登場したのである。

「シラケ」は、もう大きなことは絶対に信じないというかたちを取って始まったけれども、小さな個人の領域までは覆い尽くしていなかった。というより、大文字の世界で消滅したシニシズムとロマンチズムは、個人の趣味の領域に移行していった。「嘘と知りつつ、やってみる」のは個人の趣味の領域で生い茂り、膨大な数のオタクが生み出されていった。

《シニカルさはその後も形を変えて維持された。しかし振り返ってみると、90年代はこうしたシニカルさの作法がゆっくりと減衰していった時期だったのかもしれない。われわれはもはや、対象との間にシニカルな距離を維持できなくなりつつある。対象にシリアルにかかるか、徹底した無関心か。コミットメントとデタッチメントの二者択一しかなきがごとしである。たとえばわれわれが、まさに目の当たりにしつつある戦争。

もはや人々は、戦争に対してシニカルに構えることができなくなっている。可能な選択肢は「ブッシュとフセインの、どちらがよりましな『悪』であるか」しか残されていない。》

斎藤環がここでいっているのは、90年代以降、嘘でなければ本当であり、本当でなければ嘘であるという、嘘のなかに本当を見ようとしたり、本当のなかに嘘を嗅ぎ分けようとするシニカルな姿勢を我々は喪失してしまったということだ。「60年代の昂揚」に巣くっていたシニシズムは70年代に入って、オタクの趣味の領域に残存していたが、90年代になると、もはやシニカルな態度がみられなくなり、「確固たる自信のなさ」が若者の間に蔓延することになったとすれば、シニカルさを失うことによって我々は自分を変えることにつながる（かもしれない）行動へと足を踏みだすことができなくなつた、といわねばならない。ここでの問いは二つである。一つは、なぜシニシズムが減衰することになったのか、もう一つは、シニシズムが減衰すると、どうして行動へと踏みだせなくなるのか、という二点だ。

まず、シニシズムが減衰していった原因はなにか。いいかえると、《人々はそれが嘘であることを知っているにもかかわらず、あるいは知っているからこそ、それに進んで従う》というシニシズムを、なぜ保持しえなくなったのか。第一は前述したように、「60年代の昂揚」の行き着いた先が凄惨な連合赤軍事件であったという、大文字の世界への幻滅である。第二は、テレビ社会の浸透である。斎藤環が《シニシズムを規範的に広めたテレビというメディアが、このところ本来のシニカルさを喪失しつつある危険を指摘した》ように、テレビメディアが存在する中で生まれ育ってきた若者が、テレビメディアの嘘をわからないまま受け入れている状態が日常化していることだ。つまり、テレビの嘘の中で若者がすでに育ってきているという事実である。更に成熟社会の到来によって、現実のバーチャル化が加速していったという事態が考えられるにちがいない。

《われわれはもはや、対象との間にシニカルな距離を維持できなくなりつつある》ということはしたがって、「シニカルな距離」抜きで我々は対象と向き合わざるをえなくなったということである。対象や行動の価値を信じるか、信じないかの二者択一しかなく、その価値を疑いながら踏み入ることによって見分けていくという態度はみられなくなった。ちょうどオウム真理教に対して信じるか、信じないかのいずれかであり、接近することによってオウム真理教の正体を知るという方法が抜けてしまっているのと同じことだ。だから、《対象にシリアルにかかるか、徹底した無関心か》のどちらかになってしまうのである。イラク戦争において我々がブッシュの大義の嘘を《知っているからこそ、それに進んで従う》というシニカルさを保ちえないのは、ブッシュの大義の嘘によって、「ブッシュとフセインの、どちらがよりましな『悪』であるか」が剥き出されてしまっているからだ。いいかえると、どちらも「悪」であることには変わりないという点で、選択肢すらなくなっているのである。

《こうしたことが、若い世代にあっては「自己イメージ」について起こりつつあるのではないか。すなわち「本当の自分」にひたすら固執し続けるか、まったく執着しないか。》

後者についてはひとまず描こう。自己イメージとのシニカルな距離を維持できなくなると、人は既成の自己像に縛られる。その結果、自己が成長し変化しうる可能性に対して、強い不信と恐怖が芽生えてくる。かくしてもたらされる、「ダメな自分はダメなままである」という信念は、行動や他者との出会いへの意欲を徹底して抑圧するだろう。そうした抑圧が緩慢な衰弱死や集団自殺を呼び込んだとしても、もはや私は驚かない。

「本当の自分」などありうるのかという懷疑のもとで、それでも自己に執着し続けること。必要なのは、こうしたシニシズムを通じて維持される無根拠な自信ではないか。しかしそれをどのように可能にするか》。

シニカルな距離を保持できなくなつて、《対象にシリアルにかかわるか、徹底した無関心か》のいずれかしかなくなれば、その対象が自分自身に移行した場合、自分に《シリアルにかかわるか、徹底した無関心か》のどちらかになるだろう。自分自身に《シリアルにかかわる》とき、「本当の自分」という「自己イメージ」が限りなく募ってくる。いまの自分は「本当の自分」ではない、「^{いつわ}偽りの自分」というイメージに囚われていくのである。「本当の自分」がどこにあるなら、「本当の自分」探しの旅に赴いて、納得できるまで固執すればよいと思うが、「本当の自分」と「偽りの自分」という分裂した図式のなかで、若者はしばしば「本当の自分」を夢見るだけで、いまある「偽りの自分」を否定する作用を強めようとするのだ。「本当の自分」という「自己イメージ」そのものが、いまの自分を認めたくない衝動に駆られているから、「本当の自分」を夢見れば見るほど、いまの自分は「偽りの自分」として否定されていく。

「偽りの自分」から「本当の自分」探しに赴くのであれば、「本当の自分」が見つかるか見つからないかにかかわらず、「自分探し」のプロセスは必ずいまの「偽りの自分」に大きな影響を与えるにはおかなくなる。つまり、自分が自分を受容するようになって、いまの自分が「偽りの自分」であることなどどうでもよくなり、したがって、「本当の自分」を夢見ることもなくなっていくにちがいない。ところが、いまの自分を「偽りの自分」として否定する気持を強めていくだけであるなら、どこかにある「本当の自分」をますます見上げていくなかで、「ダメな自分はダメなままである」としか思えなくなるだろう。「ダメな自分はダメなままである」ことによって、「本当の自分」は輝きを増していくのだ。もちろん、輝く「本当の自分」はいまの「偽りの自分」との接点をどこにも持たないから、ダメな自分がますますダメになる方向へ一直線に突き進むなら、ダメな自分とおサラバするあり方として、衰弱死や集団自殺が喚び込まれることになっても、別に不思議ではない。

かくしていまある自分を自分が受け入れられなくなったとき、その絶望の深さにおいて「確固たる自信のなさ」を若者はありのままに曝け出す以外に術を持たないので。「本当の自分」がいまの「偽りの自分」を否定する意識に喚び込まれているのをみると、若者にとっての「希望の仕事」も「就職」を否定する意識に喚び込まれ、「理想の結婚」も「結婚」を否定する意識に喚び込まれているのが感じられる。「本当の自分」に出会

いたいためではなく、いまの自分を否定したいために「本当の自分」が見上げられるように、「希望の仕事」に就きたいためではなく、「就職」したくないために「希望の仕事」が見上げられ、「結婚」したくないために「理想の結婚」が見上げられるのだ。すべてが若者の「確固たる自信のなさ」を源泉としており、「本当の自分」や「希望の仕事」や「理想の結婚」を見上げれば見上げるほど、「確固たる自信のなさ」も深まるという関係に陥っているといえよう。

ところで、先に「ひきこもり」が辿りつく「ふたつの衰弱死」の事例が取り上げられていたが、ふたつの事例とも、一つは実家から出ることによって、もう一つは両親の死去によって、自分たちだけの「ひきこもり」の行く末のかたちを取っていた。要するに、「ひきこもり」に自分以外の肉親を巻き込んではいなかった。だから、「ひきこもり」は自分たちだけの「衰弱死」のかたちを取って完結することができていた。しかし、多くの「ひきこもり」は両親と同居するなかで起こっている。この場合における「ひきこもり」の行く末は、どのようなかたちを取っていくのか、という問題は残されたままであった。「ひきこもり」が解消されないとすれば、これ以外にありえないと想像される事態が現実に起きた。

《2004年10月19日、東大阪市の交番に36歳無職の男性が「両親を殺した」と自首してきた。男性の自宅では、ともに60代の両親がネクタイで絞殺されていた。この男性は伊東健一といい、20年間、自宅にひきこもりがちの生活を送っていたという。報道によれば「自分に生活力がなく、家族の将来に不安を感じたので殺した」と供述している。伊東容疑者は父の満幸さんから就職するよう言われて不安を抱いていたという情報もあり、警察では就職できない自分と両親の将来を悲観した可能性もあるとみている（10月20日付『毎日新聞』Web版）》

『中央公論』（04.12）でこの記事を掲載しながら、斎藤環は《この事件を聞いて私は「ついに来るべきものが来た」との感慨を抱いた》と述べ、「『ひきこもり』がもたらす構造的悲劇」をみようとする。これまで新潟県柏崎市で起こった少女監禁事件や佐賀のバスジャック事件など、ひきこもり青少年による犯罪とみなされてきた事件があつたが、これらの事件は数十万人規模のひきこもり人口のなかで、《確率的にこうした「異常事態」も出現する、という問題》にほかならないが、今回の事件は《ひきこもり状態との関連性が格段に高》く、《同じような状況が重なれば、繰り返される可能性が高い》点で、「構造的な問題」と捉えることができる、と彼はいう。そこで、もっと詳しく《伊東容疑者のおかれた「状況」》の把握に努めようとする。

《伊東容疑者は両親と三人暮らしで、高校中退後は定職に就くこともなくひきこもりがちの生活となり、たまに夜、出歩く程度だったという。「顔に水ぼうそうができる、外に出るのが嫌になった」と述べているとのことで、おそらく対人恐怖の一種である醜形恐怖の症状があったと推定される。母親は7～8年前から寝たきりになっており、収入は元トラック運転手の父親の年金だけだった。

10月20日付『産経新聞』Web版の記事によれば、父親は公共料金を滞納し借金返済を迫られるなど困窮しており、9月上旬には知人に借金を申し込んでいた。また、伊東容疑者は両親殺害後に、自分も死のうとして睡眠薬を飲んだが死にきれなかったと供述しているという。つまり、この事件は単なる殺人事件ではなく、むしろ「心中未遂事件」ととらえるべきなのだ。』

斎藤環は、『今回の事件によく似たケースに関わりを持った経験がある』と語って、こう指摘する。『ひきこもり状態にある成人男性が心中目的で家族を殺害し、自殺を試みて死にきれず、自首して逮捕されたケースはこれが初めてではないということだ。私が「構造的」という印象を持ったのは、まさに同じパターンが繰り返されてしまったからである。念のために確認しておくが、この事件は決して、ひきこもり青年が犯罪や暴力に親和性が高いことを意味していない。むしろ私の解釈によれば、彼らが反社会的行動に向けて暴発できないがために、今回の事件は起こったとすら言いうるのだ。』

ひきこもり状態にある（と仮定して）自分がもし伊東容疑者と同じ状況に置かれたとき、今回の事件と異なるどんな切り抜けかたが考えられるだろうか。『高齢の両親、特に介護を要する病弱な母親、電気代にも困るほどの経済的不安、そして就労への圧力』といった状況のなかで、目の前には「餓死」が確実に待ち受けている。「餓死」を免れようとするならひきこもりの自分が働く以外にない。土壇場で追い詰められたからといって、ひきこもり当事者が家から外に出て、働くことができるようになるのだろうか。働くことの困難さの度合いと、「餓死」によって家族諸共死ぬことの辛さの度合いとは、どちらが上回るのであろう。

『臨床家でなくとも常識的に考えて、20年間社会参加の経験がない人間が、単に必要に迫られただけで就労できる可能性はきわめて低い。これは私の推測だが、伊東容疑者は就労はおろか、誰かに助けを求めることが自体ができなくなっていたのではないか。彼とて知人や親戚、民生委員や福祉事務所などに泣きつけば、誰かが助けてくれる可能性を考えなかつたわけではあるまい。しかし、あえて言えば「彼ら」にはそれができないのだ。』

伊東容疑者が単に『20年間社会参加の経験がない人間』だけであった筈がない。「ひきこもり」が、『「自分にはひきこもること以外の選択肢はない』』という判断については消極的な自信がある』者たちであるなら、20年間のひきこもり状態のなかで彼は、社会参加からのひきこもりをますます深めてきたにちがいない。斎藤環は対談（『諸君！』04・6）のなかで、「滝本竜彦さんというひきこもり経験がある作家がいます。本は6、7万部売れているから、ひきこもり界のスターです。しかし彼は、ひきこもりの過去を今でも悩んでいます。ひきこもり期間は、経験として時間が流れないから、振り返ると一瞬、真っ白なのです。中学時代がつい昨日のことになります』と語っているが、ひきこもり期間がたとえ経験として空白の時間であったとしても、その時間のなかでひきこもりは進んできていると推測される。

もしそうであるなら、いかに必要度が切迫しても、ひきこもりも進んでいることによって、《就労できる可能性はきわめて低い》どころか、ほとんどゼロに等しかったであろう。「ひきこもること以外の選択肢」を消極的であれ、断念したのだから、自分のひきこもりを覆すものはもはやなにもないということも見切っていた筈だ。その意味で、《伊東容疑者は就労はあるか、誰かに助けを求めることが自体ができなくなっていたのではないか》という斎藤環の推測は当たっていると思われる。誰かに助けを求めるができるくらいなら、ひきこもりになることもなかった。ひきこもりがなによりも、「本當でない自分」への完全閉鎖であったなら、《誰かが助けてくれる可能性を考え》ることと自体がありえないことではなかったのか。

《恐怖かプライドか、その両方かは判然としないが、極限まで追い詰められたとき、「彼ら」は社会参加ではなく自滅を選んでしまいかがちだ。殺人という一線を越えてはじめて、警察に自首するというかたちで「社会参加」が可能になったとみるのは、皮肉に過ぎる見方だろうか。しかし私にはそうとしか考えられないのだ。》もちろん、「恐怖」でもなければ「プライド」でもないし、「その両方」でもない。極限まで追い詰められて自滅に至らしめるのは、敢えていえば、絶望そのものではないのだろうか。ひきこもりに踏み入ったときから、「彼ら」はどんな救いからも可能性からも自分を遮断してしまったのだ。絶望のなかにひきこもった時点で、すでに自滅を歩んでいた。だから、両親を殺して自分も死ぬという筋書きは、自滅を歩むなかで予見されていた。そんなことは考えまいとしても、ひきこもりがその途を突き進んでいることは明白であった。

斎藤環は《警察に自首するというかたちで「社会参加」が可能になったとみる》が、その前に考えなければならないことがある。それは、《伊東容疑者は両親殺害後に、自分も死のうとして睡眠薬を飲んだが死にきれなかったと供述している》ことだ。なぜ、《死にきれなかった》のか。両親まで殺したのに、どうして自分を殺せなかったのか。しかも餓死することさえなかった。土壇場で「ひきこもり」に失敗したと思わざるをえない。だから、《殺人という一線を越えてはじめて》というよりも、自分が死ねないという壁にぶつかって「ひきこもり」を完遂できなくなってはじめて、というべきかもしれない。《警察に自首するというかたちで》ひきこもりを脱することになったのだから、斎藤環もいうように、《それが彼にとって、社会参加する唯一にして最後のチャンスとなるだろう。》

ひきこもりやニートに関する記述に触れて改めて思うのは、彼らの「死に至る絶望」の深さである。この絶望の深さを前にすると、彼らが「本当の自分」はもとより、「希望の仕事」や「理想の結婚」を無邪気に願っているとは到底思われない。それらは、彼らが惨めな自分を直視することのやりきれなさから生み出された夢想であり、彼ら自身そのことを知り抜いているように思われる。

2005年6月29日記